嵐の夜に小僧は、屋根や廂を打ち付ける雨音を聞くともなく聞きながら、屋根裏の、そのくぐもった音が靄か何かのように立ち込めるその屋根裏の、ニスも何も塗られていない剥き出しの木でできた床、少し黴臭くて鼻を刺す、そして今はわずかに湿り気も帯びたその床の上に寝そべり、一心に、しかしそれでいて十分慎重に、すでにマッチ棒ほどの長さしかない先の丸まった鉛筆でゆっくりと、手元に置かれた白帳の中央に太い黒線を刻んでいた。紙の上に注がれる小僧の眼差しは、あたかも世界を分かつ何者かが今、ついにその仕事の最終段階に取り掛からんとでもしているかの如くに、厳格で、深刻で、なお無邪気なものであった。手元をぼんやり照らすランプの灯が、暗闇に小僧の顔をも浮かび上がらせていた。頬を垂れる汗の粒がまるで自らを内から照らし出すかのように、ゆらゆらと橙色の光を抱き、輝いていた。夏が過ぎ、肌を柔らかく刺す風が吹き始めるようになった今でも、台風の夜であっても、屋根裏は熱気が立ち込め、蒸し暑かった。この頃の習慣は小僧がもっと大きくなったときにまでその名残を顔の上に留めることになった。暑さのためか、暗さのためか、小僧は屋根裏にいるときに何かにつけ眉間に皺を寄せ、難しい顔をつくったが、その癖である、それが晩年の彼の気難しい、あるいはどこか悩ましげな気性の形成にまで及ぶものであったかは定かではないが、少なくとも屋根裏の暗さや湿気、遠くで轟く音の静けさの印象が知らずしらず小僧の内部にまで深く滲み込んでいるかのように見えることは確かだった。

　線は蛇行し、分岐し、まるで脳みそに刻み込まれた溝を中心から辺縁へとなぞっていくかのように、あるいは蜘蛛が一本一本丁寧にその糸を周囲に張り巡らせていくかのように、じわじわとノートの中央から渦を巻きながら外側へとみみずのような遅々とした速度で這っていった。小僧が教室で昼休みや休み時間に同じようなことをしていると決まって話しかけてくる者があったのだが、そんなときがいちばん緊張する瞬間であった。

「なにをしているの」

　そう問われても小僧は返事に窮するばかりで、何も答えらしい答えを返すことができないのが常だった。いったい何をしているのか自分でも何が何だかさっぱりわからなかったのだ。いや、わかっているつもりではいた。それは迷路だった。小僧はそう思っていたし、相手もそう思っているだろうと思っていた。だからこそ余計に、あらためてそれを問われてみると訳がわからなくなってしまうのだった。迷路なんてつくってなにをしているの、と小僧はこう尋ねられていると思っていたのだ。いや、もっと言えば尋ねられているのではなく、咎められているのだと思っていたのだ。しかし、小僧の怯えたような目つきには尋ねた者も何がしかの呵責の念を抱かざるをえなかったのにちがいない。いまにも泣き出しそうな顔をしてむっつり黙り込む小僧を見ると、尋ねた者はたいていきまり悪そうに、逃げ出すようにしてその場を立ち去ることになる。去り際に「ごめん」とひとこと言い残す者も中にはいたであろう。

　はたして小僧はなんのために迷路をつくるのか。それはもとより誰に解かれるでもなかった、自分で楽しむでもなかった、ただそれは着々と白紙を埋めていった。楽しいのだ、ただつくるのが楽しいのだ、そう自分に言い聞かせるすべを知るよりさきに小僧は罪の意識に囚われてしまった。自然と小僧は人目を避けるようになった。

　物音には絶えず注意を払っていた。雨音や風の音に紛れて階段を駆け上る音がする気がして小僧はそのたびに屋根裏に通じる、ぽっかり穴の開いたような入口にまで四つん這いでそろそろと這っていき下の様子を窺ってみたものだが、もとよりそこには誰もいない。屋根裏の下は物置になっていたが、そこは寝息さえ聞こえてきそうなくらい静かで、真っ暗で、すると小僧は余計に不安になってしばらくはじっと四つん這いの姿勢のままで下方の暗闇を見据え続けるのだった。屋根裏に灯した蠟燭の光が微かに差し込み、下方に続く木製の梯子の一部を照らしていたが、その光も梯子の上端ですぐに途切れてしまい暗闇の底に吸い込まれていくようだった。しかし、はたして底はあったのだろうか、それが今度は降りるときの不安になった。揺らめく炎が屋根裏に潜む影の一つひとつを小さく揺らし、それがわずかな空間の軋みをうんだ。次第に小僧の意識は屋根裏のものとも炎のものとも見分けがつかなくなり、あたりに拡散し揺曳する生暖かい熱気のごときものになるのを何ものかが感じているようだった。

　屋根裏の存在を知っているのは小僧だけだった。家のものは誰も知らない。母親に尋ねても、父親に尋ねても、「屋根裏？」と首を傾げるばかりでまるで知らない風なのを見て小僧は内心得意に思っていた。もとは借家だったのを立地のよさから父親が買い取ったものだったが、安普請のその家は当時からしてみてもずいぶんと古い造りをしていて、小僧の母親は「建っているのがやっとだよ」と何度も父親に改築か転居をせがんだそうだが、父親は頑としてその要求を撥ね付けて改築もしないまま一家はその家に小僧が大きくなるまで住み続けることになった。姉は十八のときに家を出たきり戻ってこないのだと、そういう怨み事を事あるごとに聞かされていたが、それは小僧がまだ産まれる前の話であって、姉の顔さえも小僧は知らなかった。

　木造二階建て、安造りのその家の階段は一歩踏み込むごとにギイと世にも恐ろしげな声を出し、小僧を夜中の便所からいっそう遠ざけるものとなった。階段を上がると廊下の両脇に二つずつ回転式の把手のついた扉があった。左側の奥の部屋が小僧の部屋だったが、残り三つの部屋はすべて物置部屋として使われていた。父親も母親も一階の居間の隣に寝室を設けていたし、二人とも書斎や自室を持つ柄でもなかったので、残りの部屋は誰も使うものがなかったのだ。そのうち一室は姉が戻ってきたときのために空けておいてあったのだが、それも小僧が小学校に上がるころまでにはすっかり物置と化していた。姉の勉強机の上にはひびの入ったちゃぶ台や雛壇やら雛人形の詰まった箱などが雑然と重ねられ、箪笥や本棚の前や横には古くなった椅子やテーブルや細々とした不用品の詰められた段ボール箱などがつけられて、そこにさらに壊れかけているかすでに壊れているような古びた家具や調度のたぐいがいい加減に詰め込まれていた。窓までもがそれらガラクタ同然のもので塞がれているために部屋はいつでも薄暗く、空気も澱んでいた。「ほんとにねえ、しょうがないねえ」などと溜息をつきながら不用品を小さく開いたその扉の隙間から放り込む母親の姿を小僧はこれまでに何度か目撃していた。物には人間の想いが宿ると言うが、物置きと化した姉の部屋にある家具や調度からは一度詰め込まれた想いが怨念や嘆息として外に漏れ出して部屋中に充満しているような気がして不気味だった。家具どうしが擦れ合うような音や床に何かが落ちるような物音がたまに小僧の部屋にまで聞こえてくることがあったが、それが実際には母親が適当に積み上げた不用品の山が崩れる音であったり、崩れた際に小物のひとつでも転げ落ちる音であったりしたにしても、小僧にしてみるとそれは怨念が物を通じて音を立てているように思えてならなかったのだ。もっとも小僧がそれをはっきりと「怨念」だと考えていたわけではない。とにかくそれは姉の部屋だったところから聞こえる人間以外のふわふわして澱んでいる何ものかの立てる音にはちがいなかった。小僧の家には一階にしか便所がなかったので、夜中に便所に行くときには必ずその部屋の前も通らなければならなかったのだが、小僧はいつもその部屋の前で立ち竦んでしまった。突然何ものかがその扉を開き自分を中に引き込んでしまうのではないか、そう思ったからだ。たとえ誰にも気づかれずにその部屋の前を通り抜けることができたとしても、その先にはすぐに不穏な音を放つ階段が待ち受けていた。その音は否が応にもそれらのものを眠りから覚ましてしまうことだろう、そうしてそれらのものは小僧を階段の闇の底に突き落とすか、怨念に満ちたあの部屋に引き込んで閉じ込めてしまうかするにちがいないのだ。そうでなくてもそれらと遭遇することを考えるだけでも小僧にしてみれば空恐ろしいことで、湧きかけた勇気もすぐにくじけてしまう。そのせいか小僧は学年が上がってもおねしょの癖がなかなか抜けきらなかったが、正体のしれぬものに取り込まれる恐怖に耐えるよりは母親に小言を言われることのほうがどんなにかよかった。しかし、小僧の母親は布団の染みを見ても、「またかね」と軽く嘆息を漏らすだけで、むしろ微笑んで小僧の頭を撫でるくらいだったのだから、下半身のじめじめとした不快感を除いては小僧はさしておねしょで罪責の念を抱く必要もなかったのだ。

　ランプを提げて梯子を下りていくと、暗闇だったものが少しずつ明るみに変わり、やがてその底が照らされる。着地とともに埃が立ち、咳き込みそうになるが、口元をおさえ喉の奥のむず痒さがおさまるのを小僧は静かに待つ。下り立った場所は実は地面ではなく、木箱の蓋の上だった。中身を確認したことはなかったが、おそらくいらなくなった家具か何かだったのだろう。借家だった頃の住人が置き忘れたか、処分の煩わしさから故意に置いていったものなのだろうが、そのような調度のたぐいが一室にまるまる長年手をつけられた様子もなく残されていたのだ。それを見たとき小僧の父親は無責任だとたいそう腹を立てたが、前の住人とはすでに連絡がつかなくなっていたし、もともと使い道のない部屋だったので仕方なくそこは開かずの間として初めから無きものと決め込むことにして母親もその考えに従った。だから父親も母親も部屋に残された物には一切手をつけなかったし、それどころか扉を開くことすらもはやしなかった。ただ小僧だけがひとり、こっそりその部屋に入り込み古代遺跡の探検か宝探しゲームでもしているかのようなスリルを味わっていたのだった。屋根裏で過ごすのには欠くことのできないランプもこの部屋を物色しているときにたまたま見つけたものだった。屋根裏の存在に気づいたのも部屋の探索にランプを使い始めたのがきっかけで、その光が薄暗い部屋の天井を照らし出すことがなければあるいはそこは誰からもずっと気づかれずに閉ざされたままになっていたかもしれない。部屋のいちばん奥にある納戸には古めかしい木箱がいくつも積み重ねられて仕舞われてあったが、屋根裏への通路はその中でもさらに奥のほうの天井にあった。梯子は初めから壁に取り付けられていた。屋根裏は小僧の身長でも不用意に立ち上がると天井に頭をぶつけてしまうくらい狭かった。しかし、この年頃の男の子ならとりわけ不思議なことではないだろうが、屋根裏の狭さと、暗さ、そしてなにより秘密めいたところを小僧は好ましく思った。子供はなべて暗がりを恐れるものと考える者があるとしたら、それはおそらく正しくない。子供には怖い暗がりと、怖くない暗がりがある。それは単に何かが出るか出ないか、という相違ではなく、何かが出てもいいと思える何かがあるか、ないか、という違いではなかったか。小僧にとっては姉の物置部屋が前者だったのだろう、そして屋根裏は後者だったのだろう。

　床拭きを五回通りやるとなんとか、寝転んでも服が木屑や埃で汚れなくても済みそうなくらいにはなったが、念のためもう三回通り拭いてからようやく落ち着いて、小僧はそこに大の字になり仰向けで寝転んでみることにした。すると、天井はもう目と鼻の先と言ってもよかった。剥き出しの木材が縦に、横にそれぞれ並行に張り巡らされて、天井を支えている、それを眺めながら床板がささくれ立っていてちくちくと痛い、と小僧はぼんやり思った。

　木箱を踏み台にして、音を立てないように一歩一歩慎重に下に下りてから小僧はランプの灯りをそっと吹き消した。それを見つからないように木箱と納戸の扉の狭い隙間に隠して、手探りで小僧は入口に向かう。すでに歩き慣れた道はランプがなくとも小僧にとっては如何ほどのものでもなかった。入口に着くと小僧は扉をわずかに開けてまずは外の様子をそっと確認する。それは父親や母親に対する警戒であったかもしれないが、ただそれだけというわけでもなかった。得体の知れない何かが自分の挙動にじっと耳を澄ましているのではないか、そんな気がしていたのだ。ちょうど真向かいの部屋が小僧の部屋だった。異常がないのがわかると小僧は一足飛びに自分の部屋の中に飛び込むのだった。

　雨戸を、雨粒が打ちつけ、風ががたがた揺らす音がした。隙間風が悲鳴のような声を出して階段を駆け上がってきた、その声は笑いさざめくようでもある。小僧の部屋の天井は屋根裏のそれに比べるとずいぶんと高く、どこか心細かった。換気口から洩れる冷気が床に沈み、小僧の頬に触れた。布団の中に頭を隠して小僧は、早く明日になればいい、と思った。

　小僧の部屋には机もなければ、本棚もなかった。小僧には勉強する習慣も本を読む習慣もなかったので、そんなものは初めから必要なかったし、欲しいと思ったことさえなかった。姉の物置部屋、小僧はそう呼んでいたが、その部屋には立派な机と本棚があった。それだけで小僧は感心してしまったくらいなのだ。きっと姉はとても優秀な人だったに違いない、小僧はそう思っていた。

　そういうわけで、小僧の部屋にはその片隅に雑然と散らばる教科書やノートのたぐいと通学カバンを除いては、そして中央に敷かれた布団とその中に縮こまる小僧を除いては、とりわけ目を引くものは何もないように見えたかもしれない。ところが、実はそれだけではなかった。小僧の枕元に置かれた薄茶色の木片、何の変哲もなくみえる木片、それは小僧が特別大切にしているものだった。

　見つけたのはランプ同様あの部屋だった。前の住人の持ち物だったのだろう、それは書斎の引き出しの奥に大切そうに仕舞われてあった。際立った特徴はまるでなく、厚さも大きさも共に単行本サイズほどの平たいただの板のようなものでしかなかった。しかし、それがどういうわけか小僧には気に入った。学校へ行くにも遊びに行くにも、小僧はそれを肌身離さず持ち歩いた。初めの頃、小僧は気づかなかったのだが、不思議なことに大人たちは小僧の板を見ると皆それぞれてんでばらばらの反応を示すようなのだった。突然怒り出す人がいたし、泣き出す人もいた。かと思えば、にやにや下品に笑いながら意味ありげに肘でつついてくる人や感心する子だと言ってむやみに褒めてくる人もいた。小僧の母親は眉をひそめ、そんなものはどこかに捨ててしまいなさいと強い口調で言ったが一方、小僧の父親はいいじゃないか、こいつもそういう年頃なんだろうと逆に宥めすかすといった具合だった。

　嵐の前の日に小僧は近所の公園で土いじりをしていた。しかし、ただやみくもに掘っていたというわけではない。木の根元の近くの地面には十円玉くらいの穴がいくつも開いていて、それはおそらく蝉の這い出してきた穴なのだが、それがどこまで続いているのかを掘り返して見定めようとしていたのだ。掘るのに手頃な木の棒がなかったので、小僧は例の木片を使って無心に掘っていたのだが、突然肩を叩かれて我に返るまで小僧はそこにいる男の姿にはまったく気づかなかった。男はかれこれ三十分以上は小僧の脇に立ち、咳払いをしたり足踏みをしたりして自分のほうに注意を向けようとしていたのだが、小僧は一向に気づく様子もなく穴を掘り続けたので、とうとう痺れを切らしてそうした次第なのだ、と男はまずそのことを小僧に説明したが、小僧は男の言うことをまったく理解していない風であった。それには男の物言いが子供に対するのにしてはちょっと堅苦しかったということもあるだろうが、「とにかく」と男は言った。「とにかくね、君ね、君のそれ、少し私に見せてくれないかね」どうせ「それ」と言ってもわからないのだろう、しょうがないなという顔つきで、男は神経質そうに小僧の木片を指先でとんとんと叩いてみせた。

　「それ」とは何のことだろうか、と小僧は考えた。男に木片を叩かれたことと「それ」という言葉とは小僧の中ではまったく結びついていなかったのだ。小僧は口を半開きにしていたので「いやだ」と断られると思ったのか、男は先手を打つように「もちろんただでとは言わない」と言ったのだが、もとより小僧は何も喋るつもりはなかった。この人は何を言っているのだろう、と小僧はまた考えてみたが、考えたところで自分にはわかるはずもないことなのだろうと思い直して諦めかけたときに、「お願いだよ」と哀願するような情けない声を男が出したところでああ、これもやはりこの木のせいなのかと小僧はようやく合点がいき少し安心することができた。「感心した」と言う人や「捨てろ」と言う人がいたかと思えば、今度は「くれ」と言う人がいる。小僧が首を横に振ると「なるほどね」と男はやや冷淡な口調で言った。「それでは君に聞くがね、それはね、ほんとうに君のものなのかね。ほんとうは別の人の持ち物だったのじゃないのか。そうだろう」

「私はね」と言って男は小僧のまわりをぐるぐる回り始めた。「私は別に君からそれを奪おうというのじゃないのだよ。それを本来あるべき場所、本来持つべき所有者に返そうとしているだけなのだ、と言っても君はきっと理解してくれないだろうね」男はひとつ大きな溜息をつき、「それじゃあ」とさらに言葉を継いだ。「それじゃあね、君、ちょっと私についてきてくれないだろうか。そうしたらきっと君にもわかるはずだ、それは君にはふさわしくないのだということがね」

　男はちょんと軽く手招きをしてから、おもむろに歩き始めた。興味本位で小僧は導かれるままに男のあとに続いた。公園はそのまま竹林に続いていた。男はその中を分け入っていった。いつのまにか風が強くなっていた。灰色の雲が空を覆い、いまにも雨が降り出しそうだった。砂場で遊んでいた五歳くらいの女の子が母親らしき人に呼ばれて、手をつないで帰っていった。砂場には黄色のバケツが取り残されていたが、女の子が忘れていったものかどうかは定かではない。公園では忘れものが子供たちの間で共有されるということがよくあることを小僧は知っていた。そのバケツも小僧は以前にも見たことがある気がしていたのだ。取っ手が赤いのがとても印象的なバケツだった。砂場の奥にはブランコがあったが、誰も漕ぐものはいない。小僧が先ほど通りかかったときには三人の上級生が立ったままブランコを漕いでいたが彼らもまたいつの間にかいなくなっていた。公園ではよく見かける三人組だったが、以前穴を掘っているときに彼らに犬の糞を投げつけられたことがあったので、小僧は彼らのことがあまり好きではなかった。先ほども漕ぎながら彼らの一人から靴をぶつけられたところだった。「靴飛ばし」という遊びが上級生の間で流行っているようで、彼らはブランコを漕ぎながら誰が一番遠くまで靴を飛ばせるかを競っていたのだった。三人は小僧を見てげらげら笑った。

　ブランコの前を来た方向とは逆に通り抜けると、そこが竹林だった。男は数メートル先を歩き、ときどき後ろを振り返った。いつもはさやさやと優しく揺れるばかりの竹林もいまは、ざわざわとただならぬ音を立てて皆ばらばらの方向に激しく揺れ動いている。どこかで雷鳴の轟く音が聞こえた。奥へ進むにつれて竹林のざわめきもいっそう激しくなるような気がしていよいよ不安が募り、小僧が立ち止まると、男はまた手招きをするのだが、その手つきがいかにも優しく見えてそれがかえって小僧をますます不安にさせるのだった。もうこれ以上は一歩も先に進めないと小僧は感じた。いっそのこと木片を手放してしまったらどうかとも思った。小僧がついてこないのを知ると男はゆっくりとした足どりで引き返して来た。相手を警戒させない速度は維持しなければならないが、それでもはやる気持ちが抑えられない、そんなにじり寄り方だった。男の歩調は次第に速まっていった。小僧はこのときどうしただろう。いまではまったく記憶になかった。気がつくと小僧は布団の中にいて、木片もちゃんと枕元に置かれてあった。

　外では風が唸り声を上げていた。突然小僧は家がまるごと海の底へと沈んでいるのではないかという錯覚に囚われた。すると、頭の中で鳴り渡る轟音は水の流れる音ということにでもなるのだろうか。こんなことを考えさせるのも天井が揺れるか、回るかしているように見えたからに違いない。鈍く単調に部屋の内外を轟き渡る音が小僧の意識をくゆらせていた。ところで、音は家の中と外とでは別の顔を見せる。家の外で聞く音は家の中では聞こえないが、家の中で聞く音は家の外では聞こえないのだ。もしかしたら小僧は家の外でしか聞こえないはずの音を家の中で聞こうとしていたのではなかったか。それは小僧にもわからないことだった。小僧は音に敏感になりすぎていたのかもしれない。姉の物置部屋からはこのときも、何ものかがかたかたと歩くような音が小僧には聞こえていたのだ。

　また、悲鳴が階段を駆け上がった、と思ったらどうやらそうではないらしい。よくよく耳を立ててみるとそれは、ほんとうの人の声だった。おおい、おおい。と、音は次第に明瞭に聞こえるようになった。小僧の母親の呼ぶ声だった。

　階段を下りてみると、台所に立つ母親の姿が見えた。小僧の姿を認め「おはよう」という母親の挨拶を聞いて初めて小僧は今が朝であるということを知った。雨戸が締め切られ家じゅうがどんよりと薄暗かった。台所のすぐ隣にダイニングと呼べるほどのものではないが、小さな食卓があり、そこに小僧の父親の姿があった。焼き鮭をつつき、ご飯を掻き込み、そのままの勢いで口の中に味噌汁を流し込む。「ぼうっと突っ立ってないで、」と小僧の父親が言った。小僧は父親の斜向かいに座り、母親は小僧の隣に座った。鮭を食べながら「しょっぱかったね」と母親が言ったが、答えるものはない。「学校、休みかな」と小僧が呟くと、「何を言ってるの」と母親が呆れ顔で言った。台風はもう去ったのだそうだ。「午後からは完全に晴れるそうよ」と言ってから、「しょっぱいな」とまた小僧の母親は小さく呟いた。「残念だったな」とがははと大げさな笑い声を立てて、小僧の父親は「遅刻するなよ」と言い、爪楊枝を口に挿し入れてそのまま席を立った。鮭は確かにしょっぱかった。朝食を食べ終え食器を流しに運ぶと、小僧は階段を勢いよく駆け上がった。

　雨戸を開けると、雲はいつもよりも少し速く流れていたが、雲間から覗く空は青く、澄んでいた。小僧は教科書やノートと一緒にカバンの中に、いつものように木片を詰めた。小僧は階段を下りる前に姉の物置部屋の中を覗いてみた。それが小僧の習慣になっていた。朝だけは下から聞こえてくる父親や母親の声や生活の音に勇気づけられて、その扉を開いてみることが小僧にもできたのだ。物の位置が多少ずれているような気がした。昨夜の嵐の轟音に紛れて部屋の中でもひと騒ぎしたのだろうか。と、「まだいいの」と下から呼びかける母親の声があり、そこで小僧は階段を下りて、学校へ向かった。

　道路にあちこち大きな水たまりや、小さな水たまりができていた。水の奥に電信柱が伸び、その先に青い空が広がり、雲が悠々と流れている。小僧はそれをぴょんぴょん飛び越えながら歩き、長靴だったら足を浸けられるのになとふと思ったが、いや、長靴は他の生徒に馬鹿にされるから、とすぐにその思いつきを打ち消した。長靴を履くのは子供なのだ、と小僧は思った。それに雨のすっかり上がってしまった帰り道などに一人だけ長靴を履いて歩いていたりするのはなによりも情けないことなのだ。今日も午後はすっかり晴れるというのに長靴を履くなどとはもってのほかだ。小僧はなるべく大きすぎもせず、小さすぎもしない水たまりを選んで飛び越えていた。地面からは湿った土のにおいが立ち上っていた。

　姉がいたら一緒に通学したりもできたのだろうか、と小僧はたまに想像することがあった。「勘当」という言葉を小僧は知らなかったが、小僧の姉もそれに近い状態であったのだろう。戻ってきてくれたら、と内心思っていたのは母親だけではなかったはずだが、父親は姉が家を出てからというもの姉については完全に沈黙を貫いていた。母親はたまに姉から何の音沙汰もないことに不平を漏らしていた。連絡がなければ許すにも許せない。むしろ許されていないのは自分のほうではないか、あるいは父親はそのような意識を持っていたのかもしれない。事実、そうだったのかもしれない。姉は父親を許していなかったのかもしれない。しかし、小僧にはよくわからない話だった。

　生きていたら二十三歳だよ、と母親が二年前に何気なく言った言葉を小僧は覚えていた。二十三に二を加えたら二十五だと小僧は思った。しかし、二十五の女性の姿は小僧にはまったく想像がつかなかった。中学生や高校生なら紺色の制服を着ている。学校で勉強をしたり、昼休みに友達とおしゃべりをしたりする。放課後に喫茶店というところで寄り道をしたりする、そしてまたおしゃべりをしたりする。それでは、二十五の女性は。何を着ているのだろう、何をして生きているのだろう。どこにいるのだろう。まったく見当もつかなかった。小僧にとっては、二十五も三十五も変わらなかった。そもそも、中学生や高校生であっても制服を着ていなければ、小僧には大学生や一般の社会人の人たちと見分けることさえきっとできなかっただろう。だから、小僧は制服を着ていない女の人を見ると、特にそれがきれいな人である場合は誰彼となく、ひょっとしたら、といつも心のどこかで思うところがあり、つい振り返ってしまうのだった。

　もとより会ったことも話したこともない姉だ、恋しいとか寂しい、というのではなかった。むしろそれは天使がいたら、とか神や仏がいてくれたら、というのに近い憧れのようなものだったのではないか。きっと勉強を教えてもらえる、と小僧は思った。小僧は国語も、算数も、理科も、社会も、好きではなかった。学校のみんなが威勢よくハイッ、ハイッと競うようにして手を挙げる問題でも、小僧だけはよくわからなくて、もじもじと縮こまって「早く誰かあてられないかな」と嵐が去るのをじっと待つような思いでいることがしょっちゅうあった。しかし、そんな問題に限って教師は小僧をあてるものだから、小僧はいつも物笑いの種になってしまう。あいつは勉強もできないし、運動もできない、いつも変な模様ばかり描いている、気味の悪いやつだ、と生徒たちは陰口を叩いた。そんなときに、「姉がいてくれたら」とほんのいっときだけ、姉のことが小僧の脳裏に浮かんでくるのだった。

　あるとき、小僧の父親が小僧の母親のいないときに、若い女の人を連れてきたことがあった。女の人は自分のことを「お姉さん」と言っていたし、父親もその人のことを「姉ちゃん」と言っていたので小僧にもすぐにそれとわかった。姉が戻ってきた、小僧はそう思って居間のソファにもたれ掛かる女の人に慣れない手つきでお茶を出すと、その人は優しそうに微笑んだ。勉強を教えてほしいと小僧が言うと女の人は可笑しそうにして小僧の父親のほうを向いた。父親は高笑いをして、「ああ、あとでな。おとなしく部屋で待ってな」小僧の頭の上に手を乗せた。すると、小僧は目を輝かせて階段を駆け上るのだった。

　小僧は畳の上に寝転び、学校の教科書やノートを広げながら、何を教えてもらおうか考えた。国語が苦手だから国語を見てもらおうか。けれど、社会もよくわからないし、やっぱり社会にしようか。そういえば、算数もちゃんと問題を解けたためしがなかったな。理科もちんぷんかんぷんだ。教科書をめくるうちに小僧は眠気に誘われた。磨硝子の出窓からやわらかい光の粒子が畳の上に降り注いでいた。まどろみのなか、小僧は階段を上る足音を聞いた。姉だろうか、と小僧はぼんやり思った。しかし、足音は二つある、それが部屋の前で止まり、把手を回し、戸を押す音に変わる。「おやおや、寝てしまって」とでも言われるかと思ったが、依然小僧の部屋に人の現れる気配はない。すると、隣の部屋から男の人の哄笑が聞こえた。女の笑い声も聞こえた。それがやがて静かになる。今度は噛み殺したような声が聞こえてくる。まどろみが深まり、音が遠のいていく。そうだ国語にしよう、漢字の書き取りをみてもらおう、小僧はおぼろになる意識の中でそう思った。女の人はさっきのように小僧に微笑みかけ、優しい手つきで小僧の頭を撫でる。小僧は「木」という漢字を書いた。木、木、木、木、木。木は二本で林になる、三本で森になる。森と林で森林になる。小僧は得意げに、女の人にそう説明するのだ。女の人の笑顔が逆行を受けて暗くかすむ、そして次第に薄れてゆく。白い光の中に、溶けてゆく。消えてゆく。すごいね、そう言う女の人の声のイメージだけが小僧の頭の中でこだましていたが、それもやがて光の中に溶けていった。

　小僧の母親は入院していた。小僧が見舞いに行くと、なんでもない、ただの疲労だよ、点滴を打って、三日も寝れば、すぐによくなる。近くにいるのに、母親の声がやけに遠くに聞こえた。寝巻の袖の捲れた腕が点滴のチューブに繋がれていた。病室には小僧の母親のほかに五人の患者が寝ていた。三台ずつ二列に、ベッドは向かい合って並んでいた。母親が寝ているのは窓際のベッドだった。窓辺の机の上に置かれた一輪挿しに小さな花が活けられていた。名前は知らなかったが、みずみずしくて艶と張りのある、白い花弁の花だった。机の横には小型のテレビがあったが、小僧の母親は電源の入っていない、病室をぼんやりと黒い影で映し出すだけの、その画面のほうを見るともなく、ただ眺めていた。外は晴れていた。天女の羽衣のような薄い帯状の雲が、遠く、高い空に幾重にも重なり合い、棚引いていた。やわらかく、暖かい日の光が病室に差し込んでいる。窓からは病院の中庭が見下ろせた。芝生と芝生のあいだの道を看護婦に押されて、一台の車椅子が横切っていた。押されているのは老人のようだが、病室からは薄くなったその後頭部しか見えない。老人の視線は前方に見える木の枝の紅葉か、下草と落ち葉に紛れて戯れ合う雀のほうに向けられているようだった。老人が何かを話しているのか、看護婦は老人のほうに心持ち身を屈め、微笑んでいる。建物の影から芝生の中へ、二人の子供が子犬のように転がり込んできた。まだ小学校に上がるか、上がらないかくらいだろうか、二人はじゃれ合い、もたれ合い、芝の上に崩れ込んだ。二人の笑い声が病室にまで届いた。傍にいるのは二人の母親だろうか。芝生の手前で子供たちの様子を静かに見守っている。車椅子の老人も振り向いて、子供たちのほうに目を向けていた。奥のベンチには背広姿の若い男が腰掛けており、遅めの朝食か、早めの昼食を取りながら彼もまた、子供たちのほうを見ていた。足元には二羽の鳩が歩いている。

　昨日の夜はお月様がきれいだったよ、そう言ったきり小僧の母親は目蓋を閉じてしまった。帰ろうかと小僧は思ったが、家に居てもきっと退屈するだけなので、もう少しいることにした。小僧は通学用鞄から白帳を取り出すと、ベッドに取り付けられてある病人用のテーブルの上にそれを広げた。ついでに木片も取り出して、表面の手触りを確かめるようにそっとひと撫でしてから、それもテーブルの上に置いた。近くにあるだけで、不思議と心が落ち着く木片だった。小僧が学校にいるときも、公園で遊んでいるときも、家で寝ているときも、木片はいつでも小僧を見ているようだった。感心する子だ。どこからか声が聞こえてきたかと思うと、それは小僧の母親と向かい合わせで寝ている、女の人の声なのだった。ベッドを起こして、小僧のほうに笑顔を向けていた。小僧は木片のことを言われているのだと思った。お母さんはすぐによくなるよ、その人はそのように言い添えた。年齢は小僧の母親と同じくらいに見える。病人のわりには、やけにふっくらとして血色のよい人だった。

　小僧は自分でつくった迷路を解いてみようとして、迷路の道筋を指でなぞってみた。しかし、何度やってみても解くことができなかった。小僧の迷路は、道が分岐してからすぐにどちらかの道が行き止まりになる、というのではなく、正解ではないほうの道でも正解の道と同じようにどこまでも分岐し続けたので、最終的に間違いに気付いたとしてもそれはすでに長い道のりを辿り切ったあとのことであり、どこで間違えたのかは最後まで分からないようになっていた。さらにその迷路には行き止まりすらないことがあり、そのような場合には挑戦者は同じ道を何度も循環させられることにもなる。しかも、三叉路とか五叉路のような、二股以上の分岐を持つ道も幾度となく現れるので、すべての道順を網羅的に試すという鈍くさいが堅実に見えるその攻略法であっても膨大な時間を費やさない限りは無駄骨に終わることだろう。結局、目的地に辿り着くためには運に頼るしか道はないのだ。このような構造を小僧は意識的に作り出したというわけではなかった。ただひたすら複雑さを目指してつくっていたら、自然と誰にも解けないような難解なものになっていたのだ。小僧は知るよしもなかったが、その迷路は人間の脳みその形に偶然にもよく似ていた。それはたいていの場合、人間の脳で言えば、脳幹と呼ばれる脳みその根幹にあたる部分にスタート地点が定められており、前頭葉とか頭頂葉とか後頭葉の辺縁部分にゴールが据えられているのだった。

　ゴールに辿り着けなくても落胆することはなかった。むしろ小僧はそのことに満足を感じているのだった。小僧は同じ迷路の道筋を飽きもせずにいつまでも指で辿り続けていた。いつからか、小僧の背後にじっと立つ影がひとつあったのだが、小僧は気づかなかった。肩に手を掛けられて初めて振り返ると、あの男だった。男は燕尾服を着て、鼻眼鏡を掛けていた。木綿の手袋を着けた手の指を男は小僧の白帳の上にゆっくりと這わせた。それは迷路のスタート地点を出ると、分岐路を迷わず、するすると進み、あっという間にゴールに辿り着いていた。実はこのとき男はインチキをしていたのだが、まじまじその指の動きを追っていたのにも関わらず小僧はそれに気づかなかった。男がほんとうに正解の道をいともあっさりと見つけてしまったのだと思って、小僧は目を丸くさせた。自分のほうが木片の持ち主にふさわしいということがこれでわかっただろう、とでもいうように男は小僧の肩に手を掛けた。小僧はそれには答えず、もう一度自分で迷路に挑んでみた。男がやすやす解いてしまったのを見て、自分にもできるような気がしてきたのだ。しかし、やはり小僧には、いくらやっても正解に辿り着くことができなかった。ゴールに近づこうとすればするほど、小僧の意志とは裏腹に、かえって道はゴールから遠ざかっていくのだった。

　鴉の声が聞こえた。窓から、朱色に染まる雲と家並みが見えた。虫の声が耳鳴りのように響いている。窓は閉まっていたが、病室の中にも夜気が漂い始め、昼間よりも少し肌寒い。小僧が目を覚ましたとき、男の姿はもうなかった。小僧は白帳に顔を押し当てて寝ていたから、涎が白帳の上に垂れて、そのせいで鉛筆の線が少し滲み出していた。小僧が服の袖で拭うとそれが余計に広がり、迷路の道が溶けてぐちゃぐちゃになってしまった。母親を起こさないように静かに帰り支度をして、席を立った。しかし、母親の顔を見ると、ずっと閉じていると思っていたその目がきっと見開かれていた。それは、何かをじっと見据えているようで何も見ていない、何も見ていないようで実は確かに何かを見つめている、そんな目だった。ありがとうね。去り際に小僧の母親は顔を動かさずに、横目で小僧にそう言った。小僧は姉が帰ってきたことを話すつもりでいたが、ついに言いそびれた。言わないほうがいいような気がした。帰りの途上、道端にススキとブタクサが交互に群れて咲いていた。暗がりではブタクサの花の黄よりも、ススキの穂の白さがひときわ目立つように思われた。今日も月はきれいだろうか。小僧は薄暗い空を見上げてみたが、そこにはうっすらと掛かる雲が見えるばかりだった。今度ススキを持って行ってあげよう、小僧はそう思った。

　どれくらいの間だったか、白くてやわらかい、霧のような光で満たされた部屋の中に、小僧の意識までもがすっかり溶け込んでしまっているかのようだった。そこへ、姉の物置部屋のほうから物音が聞こえた気がして、顔をもたげると小僧の頬に張り付いた教科書のページがめりめりと音を立てて剥がれた。小僧はあらためて耳を澄ませてみたが、もう何も聞こえなかった。真夜中ではないかと思われるくらい静かだった。ただ光ばかりが音もなく騒いでいるようだった。畳の上で蚤が跳ねているのが見えた。扉を細く開ける。こんなときこそ恐い、と小僧は思った。とりわけ音のない空間は大気が希薄で、陰圧になっているために、何かちょっとしたきっかけで、たとえば部屋の扉を開けるなどするときに、一気に音が雪崩れ込んでくるのではないかと、心ならずそんな気がしてくるものだ。廊下に出るとまず、床の軋む音に驚かされたが、それは小僧が自分で立てた音だった。そこで足を止めて、耳をそばだててみるとやはり、姉の物置部屋から何か物音が聞こえる。ボールが跳ねて、ぱちんと床を叩きつけているような音だった。迷いに迷ったが、怖いもの見たさというより、早く正体を突き止めて不安を消し去りたいという気持ちから、小僧はついに扉を開ける決心をした。中にいるだろう何ものかに気づかれぬように、小僧は把手を時計の秒針よりもずっと遅い速度で回した、時計の針なら十五秒で進むところを、小僧はその何倍もの時間を掛けて回した。すると、小僧が扉をほんの少し開けただけでたちまち中から、そのわずかな隙間を抜けて、白く粘っこい煙が小僧の眼前に迫ってきた。異臭が鼻をつき、次いでひりひりするような違和感を喉元に覚えた。小僧は我も忘れて一目散に階段を駆け下りて、気づいたときには一階の台所の前に立っていた。息が荒い。小僧は水道の蛇口を捻り、身体に纏わりついた穢れを落とすように、何度も顔を洗い、口をゆすいだ。

　ステンレスの流しには、まな板と包丁といくつかのお椀やお皿が重ねられて置いてあった。母親が入院した日の状態のままだった。小僧が顔を洗い終わってからも、滴がお椀に張られた水面を破る音が数回続き、やがて水が切れると音も消えた。居間に人影があった。父親かと思ったが、そうではなく、またあの男だった。男はソファから台所へ振り返り、小僧をじっと見据えていた。見覚えのある顔がやけに懐かしく、心強かった。煙に襲われたと小僧は男に話した。すると男は少し頭を傾けて眼鏡越しに小僧の顔を見る、それから含み笑いを浮かべ、おもむろに立ち上がった。男はオーバーオールを着ていた。両手をポケットに突っ込み、親指だけ出して立つその姿がやけに幼い。服装のせいか背も前よりいくらか縮んでいるように見えた。男がちらりと手のあたりを見た気がして、小僧も見てみると、なぜか小僧の手には木片が握られているのだった。小僧は動揺のあまり部屋を出るとき無意識にそれを手に取っていたのかもしれない。ということは、先ほど顔を洗うとき小僧は一度それをどこかに置いて、それからまた手に戻したということになるはずだが、そのときも小僧は木片の存在に気づいていなかった、ということになるのだろうか。小僧は訝しんだ。気のせいさ、男が言った。小僧は男が「木のせい」と言ったのだと思った。そうか、これもまた「木のせい」なのか。

　しかし、二階へ上がってみると、姉の物置部屋からはやはり、白い煙が洩れていた。「木のせい」なのだから恐くない、勇を鼓して小僧は再び扉を開ける覚悟を決める。把手に手を掛けるが、恐怖が勝りそこで手が止まる。開けたとたん、そのまま部屋に引き込まれ、二度と戻れなくなったら、と小僧は考えた。でも「木のせい」だから、と小僧はまた思った。しかし、「木のせい」ならどうしたというのだろう。「木のせい」でも引き込まれたら一巻の終わりではないか。わずか数センチの間で扉が揺れていた。たとえ数センチであってもその動き方はいたく不自然だったために、中のものが気づいてしまったらしい。声がした。誰かいるの？小僧はどきりとした。心臓がはぜたかと思った。しかし、とうとう観念して扉をすっかり開けてしまう、するとそこにいるのは女の人なのだった。

　あら、と女の人が小僧を見て言った。彼女は机の上のちゃぶ台に腰掛け、足で椅子の背もたれを押したり、引いたりしている。たまに足が滑ると、椅子の脚が床とかち合うときに、何かが破裂するような音が立った。左手をちゃぶ台につき、右手をだらしなく垂れていた。右手の人差指と中指のあいだに煙草が挟まれている、その煙が部屋中に立ち込めていた。壁際には段ボール箱が積まれているため、窓はほとんど覆われていたが、上端の隙間からわずかに光が射して、煙を白く透かせていた。小僧は女の人が物置と化した部屋を見て怒っているだろうと思い、母親が来たらすぐに片づけてくれると弁解じみたことを言った。しかし女の人はそれには取り合わずに軽く笑みをつくってから、「勉強見てほしいんだったよね」と言った。小僧は黙って頷く。ごめんね、お姉さん勉強わかんないや。

　それからまた別の日に訪ねる者があった。その人も自分で「お姉さん」と名乗り、小僧の父親も「姉ちゃん」と呼んだが、前の人とは明らかに別の人であった。このときも小僧はお茶を出したが、女の人は礼を言う代わりに小僧の身体を抱きすくめた。まあ、かわいい。女の人の声は妙に上擦っていて、落ち着きなかった。甘い、花のようなにおいがした。唇がタラコのように厚く、その赤さは病的なほどだった。別の人だ、小僧は思った。父親にはそれがわからないのだろうか。女の人が帰ってから、父親が惣菜屋で買ってきた弁当を小僧はひとり、つついて食べた。母親の入院が思いのほか長引いていた。父親は一足先に食べ終え居間で野球中継を見ている。食卓から、ソファにもたれる父親の後ろ姿が見える。父親は味方のチームが三振を取ったり、ホームランを打ったりするたびに手を叩いて大げさに歓び、逆に敵のほうに得点が入ったりすると「ちくしょう！」と膝を打ち、罵り声を上げた。ひょっとして父親は姉の顔がわからなくなっているのではないか。小僧は弁当を食べ終えると、父親の後ろに立った。前の人とは別人だと父親に教えてあげる必要がある、小僧はそう考えたのだ。しかし、言葉が出てこない。すると、また父親が子供のようにガッツポーズを取り、声を上げた。味方のチームに点が入ったのだ。

　顔を忘れてしまった姉を探し求めて、父親は街を彷徨い歩く。そのたびに、見覚えもない女の人を姉と思いなし、家に引き連れてくる。引き連れるたびに、間違いと気づく。そして、また彷徨い、また引き連れる。また、間違う。いや、間違えたかどうかすら父親にはわからないのかもしれない。次の日になり、前日の女の人の顔を忘れる。忘れた女の顔を求めて、別の女の人をそれとしらずに引き連れる。そして、また忘れる。

　真実を告げたとき父親はどんな顔をするか、見るのが恐かった。青ざめる、あるいは虚を突かれ唖然とする。小僧は罪責の念に囚われた。自分はなんて残酷なことをしようとしていたのか。想像しただけで、可哀そうになる。それからも何度か小僧の父親は女の人を連れてきたが、小僧はもう何も言うまいと思った。姉はもう帰ってこない、小僧は努めてそう思うようにした。しかし、いざ新しい女の人が来てみると、今度こそもしかしたらという気がしてきて、思わず胸が膨らみ、結局は毎回、小僧はその人の顔を見るためにお茶を出しに行くのだった。

　遠くの水たまりが朝日を受けて白く輝いている。風に撫でられて、光の粒子が水面で弾け、沸き立つように踊る。学校が近づくにつれ、目の前を歩く生徒たちの数も次第に増えていった。同じ頃合いを見計らってそれぞれの家を飛び出した人々がまず、あちらこちらで小さな流れをつくり、それがお互いに合流し合ううち、やがてひとつの本流となり、集約され、ひととこに注ぎ込むのだ。建物が引き寄せ、形作る人の流れが朝になると町中に溢れ返る。それが暮れ方になり建物が役目を終えると、そこから次々湧き上がる人々の粒が今度は町全体に花のように広がり、各々の家におさまっていく。建物の数だけ花が存在した。それは一斉に花開いたかと思うと、瞬く間に萎んでしまう、そして静かに夜が始まる。

　校門がやっかいだ、そう思いながら学校の前の四つ角を左に折れると、毎度のことながら、そこで世界の様相ががらりと変わってしまい、静けさを頑なに拒むかの如き、怒濤のような挨拶の声が迫り、気圧され、緊張の度が一気に高まる。風紀委員の生徒たちと担当教師が校門の両脇に立ち並び、生徒が来るたびに一斉に挨拶を浴びせかける。威勢だけはよいが、顔はどこか虚ろである。「おはようございます」の声を発しながら、心はどこか別のところにいて、別のものを想っている。製品をつつき異常を点検する流れ作業の工員よろしく、流れ込む生徒の粒一つひとつに声を投げかけ、その応答を見て、異常がないことを確認することで監査員然とした教師の目を満足させる。

　小僧が通り抜けようとすると、たちまち声が飛ぶ。「挨拶はどうした！」腕組みをして仁王立ちする教師が小僧の顔をじっと睨んでいた。はじめから不良と決めてかかったような目つきだった。緊張が高まれば高まるほど、言葉が奥に引き込み、吐き気が喉元をのぼるときのように空気の塊だけが口から吐き捨てられる。早く言わねばと焦ると余計に声が後退し、音が空虚にかえる。そのうちに声が出ているのか、出ていないのかすら判断がつかなくなり、まわりの音も聞こえなくなる。音を取り戻そうと必死にもがくが、もがくとさらに、音が遠のく。聞こえるものも、聞こえない、聞こえないものも、聞こえない。空虚となった音が、その無音が、身内でざわざわと騒ぎ立てる。

　チックのように首をリズミカルに動かし、鯉のようにしきりと口をぱくぱくさせている様子が教師の目にはふざけているように映ったらしく、苛立たしげな声で「こっちへ来い」と教師は小僧を呼び付けた。しかし、小僧の耳に教師の声は届かない。焦慮に駆られ小僧の動きがますます激しくなる。耳や口だけではなく、小僧にはすでに見るものも見えなかった。音を内に求め、意識が内奥に沈んでいくにしたがい、身体の機能も次々奪われていくようだった。身体ごと何ものかに奪われていく恐怖を小僧は意識の底で感じた。気色ばんだ様子で、教師が小僧の腕を強く掴んだときにはすでにそれを腕に感じているのは小僧ではない、何ものかでしかなかった。

　気づくとひとり校門に取り残されている。始業のベルが鳴り、ようやく音が戻ったことを知る。急いで教室に駆け込むと、静まり返った教室でチョークの音だけが響いている。小僧が教室に入ると生徒たちの視線が集まり、やがて教師も気づき、「またおまえか」などとぶつぶつ小言を言って名簿にチェックを入れる。気立てのいい教師の場合は「重役出勤とはいいご身分だな」などという戯れ言ひとつで済まされることもあったが、たいていの場合はそのまま廊下に立たせられた。出がけに生徒のひとりに消しゴムのかけらを投げつけられたりもする。教師はそれを見咎めるが、生徒のあいだには微かな忍び笑いが起こる。このようなことが日ごと繰り返された。

　教室の廊下側の壁の中ほどには磨硝子が嵌め込まれていて、人影が透けて見えるようになっていたので、中から一挙一動教師に監視されているような気がして小僧は廊下にいるときも下手に身動きが取れなかった。手にしていた鞄が重くなりだし、手が痺れてきて床に下ろしたかったが、強制されているわけではないのにそれさえも下ろすのを許されていない気がして小僧はなんとか持ちこたえようと肩を上下に揺らして腕になるべく負担のかからない角度を探っている、その動作のほうがよほど教師の目には奇異に映ったことだろう。

　チョークが黒板をかつかつと打ちつける音や、鉛筆がノートの上を走る音が聞こえるうちは教室の意識がよそへ向いていることがわかるので、緊張を多少やわらげることもできた。しかし、音が消え、教室が息をひそめるようになると、とたん、硝子越しに視線への意識が生まれ、背中がぴりぴりと張り詰め出し、全身に強張りが広がっていくのを感じた。一度強張ってしまうと今度はそれを解くタイミングがなかなかつかめず、その間にも強張りは体内までをも蝕んでゆき、唾を飲み込む音や腹の音にさえ教師が聞き耳を立てているような気がしてくる。監視の目が口腔を貫き、食道を流れ、胃に落ち、腸内を巡り、肛門から抜けていく。心臓を締め付け、肺を縮み込ませ、脳を痺れさす。歯科衛生から食生活まで、小僧の私生活全般をその細部に渡り教師に覗きこまれている、非難がましい目を向けられている、そんな意識に誘い込まれ、やがてそれが屋根裏にまで入り込み、膝から下を垂直に立ててぶらぶらさせながら、うつ伏せで寝転ぶ小僧をじろじろ眺めまわす、そして薄明るいランプの下で橙色に照らし出された白帳に今まさに描きこまれているところの、あたかも脳みそのようなその図柄についに目を向ける。そこに小僧の意識、ひいては悪習の根源があるに違いないとでもいうように、それは迷路の道筋を辿りながら科学者然とした態度で無邪気なその確信のもとで構造分析を開始する。幾通りもそれが迷路を巡るうちに、小僧もいつしか自分の意識がほんとうにその中にすっかりおさまっていて、それが今、次第に暴かれつつあるのではないかという観念から逃れることができなくなり、逃げ場のない恐怖に駆られる。外側からも内側からも、小僧の行動から考えから何から何まですべてがすっかり見透かされている、そんな気がしてくるのだ。

　すると、鞄を持ってあげようか、という声が聞こえてくる。しかしその声すら小僧にはどこか脅迫めいた響きを帯びて聞こえ、さらに縮こまり、鞄を握る手にいっそう力をこめる。そのくらいの物が持てないようでは、という声でもあり視線でもあるような、ある種の印象が身辺に纏わりつき、次いで、君の迷路はすっかり解明してしまったよと、薄笑う口元が暗闇から浮かび上がる。笑みの裏に、おそらくは嵐の日の夜の、何も知らない小僧の姿が透けて見える。立て付けが悪く、隙間風がしきりと鳴った。戸を叩く雨の音が高まると同時にそれがたちまち、やまんばの姿に化けて階段を駆け上る。やまんばが二階の廊下をのっそりと歩き、音を嗅ぎ付けようと息をひそめている姿が脳裏をかすめ、小僧は息を凝らして屋根裏の入口のほうへ目を向ける。今にもそこから鬼の形相がぬっと顔を出すのではないかという、不気味な静けさが身に迫り、体じゅうから汗が湧き出る心地で、ひとり身構える。それでも視線は手元の白帳の、書きかけの迷路に注がれたままだ。まじないを唱えるつもりで迷路の道筋を辿っていると、男の指先が思い返された。

　ちょび髭をさすりながら男が言う。この迷路には出口がない。出口がないのだから、最終地点というものも当然のことながら、ない。同じ道を幾度も巡るうちに、やがて徒労に気づき踵を返すが、時すでに遅く、入り口すらそこにはもう、ない。ただ繰り返し同じ道ばかりが、異なる経路を経て、現れる。その歩みばかりがただ新しい。その都度の繰り返しが二度と戻らない繰り返しとなる。その都度の歩みを一歩ごと繰り返す。辿り着いたと思ったら、ゴールはそこからたちまち消えてしまう。消えないとしたらそのときは、もう気が触れ始めている。涎で溶け出し、歪んでしまった道の跡を指先で撫でながら男は、絶えず道は生まれ変わる、と言った。ごわついた紙の表面が男の指を微かに撥ね返し、その音が静かに病室の澄んだ空気に触れた。

　昨夜は月がきれいだった、と言って口元に笑みを浮かべたまま、母親は目蓋を閉ざしてしまった。病室の窓から見える景色が学校の廊下からのそれとまったく同じに映っていた。校庭のトラックのまわりを教師にしたがい、生徒たちが一列に等間隔で連なり、テンポよく駆けている。教師が笛をふた吹きすると、いち、に、と生徒たちもそろって掛け声を出した。笛の音と掛け声とが交互に響き渡る。時計回りか、反時計回りか、どちらだと思う、と男の声が問うた。時計の針がどちら向きに回っていたか、記憶がおぼろげで、思わずあたりを見回してみたが、時計はどこにも見当たらなかった。あれはしかし、きっと時計回りだったはずだとトラックを巡る生徒たちの動きを目で追いながら小僧は思った。ところが男は小僧の答えを待たずに、君はあれを反時計回りだと思うかもしれないが、と言い出したものだからそこで小僧の頭の中はすっかり混乱してしまった。しかしね、と男は小僧のある程度の理解力を前提にしてそのまま話し続けた。あのトラックのちょうど真ん中で仰向けに寝てみるがいい、そして地面から伝わる音に耳を澄ませてみるがいい。すると、遠くから微かに、靴と地面の砂が擦れ合う音が聞こえてくるはずだ。その足音はどちらから、どちらへ流れているだろうか。男は耳を澄ますようにして目を閉じ、耳元に手を当てた。小僧はこのとき男が何をしているのか、何を言い出したのかさっぱり意味がわからなかったが、黙って男の様子を見守っていた。しばらくして男がようやく元に戻り、口を開いた。それが大地の耳だ。それが大地の視線というものだ。君のその木も、と言って男は小僧の鞄のほうにちらりと目をやった。それももとは大地に属するものだった。君自身だってほんとうは大地に属している。それがいつしか、時計の発明とともに関係がすっかり逆転してしまった、というわけだ。君は木を所有していると考えているのかもしれないがね、事実はそうではなく、君は木に所有されているにすぎないのだよ。いや、所有というのも正確にはあてはまらないかもしれない、だって君はもともと木の一部でしかないのだから。君が木を見ていると思っているときだって、実際に見ているのは君ではなく、木のほうだったんだ。木が君を見ているのだよ、もっと言えば、木が木を見ている、大地が大地を見つめている、それだけのことにすぎない。君は何一つ物を所有することなどできはしないのだ。

　君が木の姿を借りているのではない、木が君の姿を借りているのだ。男はもはや小僧にではなく、あたかも木に言い聞かせでもするようにこう言うのだった。言うまでもなく、木の所有者は君以外にはありえない、しかし君よりももっとふさわしいものがいることもまた疑いえない事実だ。ただそのものはもはや木を所有しえない。だから君が木を所有するなどということも永遠にありえないのだ。君が君を所有することなど土台無理な話なのだから。

　見上げれば思い出す、高い空をまばらに覆う綿のような雲、その雲がおのれの内に染み込ませる光の白さを。そよ風が吹くと、木の梢がざわざわと揺れる。庭の小さな池には数匹の鯉が泳いでいる。葉が落ちると、餌か何かと間違えるのか、鯉が水面に顔を覗かせる。縁側で寝転ぶ横顔に日の光が射しては、隠れ、隠れてはまた射し、眩しさがきわまらぬうちに、その余韻が消え去らぬうちに、顔の上に光と影が交互に訪れて、消えていく。

　縁側の長い廊下の奥に階段がある。上ると木の板が軋んで、音が立った。その音がかえって静けさを際立たせる。薄暗い部屋のなかで数人の大人たちが輪になっている。見ると、盥がある。お湯のなかで何かが動いている。大人たちの身体の隙間から、小さな手や足や頭が、きれぎれに浮かび上がる。お湯がたゆみ、跳ね返る音が聞こえる。部屋には熱気がこもっていた。血と汗が混じったような生臭いにおいがする。声をひそめて、囁き合う声がどこか明るくて、楽しげだった。しばらくすると、ようやくひとりが気づいてこちらを振り返り、男の子だよ、と笑顔で告げた。奥に敷かれた布団の上に横たわるものがあった。小僧の母親の姿だった。大事を遂げたその者の目は安らかに閉じられている。

　あのとき、誰が何を見ていたのだろう、小僧は病室で眠る母親の顔をつくづく眺めながら考えた。今の家に越してきたのはかれこれ数年前、小僧がまだ幼稚園に上がる前のことで、それ以来小僧が旧家を訪れたことは一度もなかったはずだ。すると、あれは小僧が三歳か、四歳以前の記憶ということになるのだろうが。しかし、母親はいったい何を産んだというのか。小僧の下には子供などひとりもいなかったというのに。

　窓の外で雀の戯れる声がした。ベンチにひとりの老婆が、杖を正面に立てたままの姿勢で座っている。眺める視線の先には、午後の日射しに仄白い光を返し、自身は淡い緑色を映しているその芝生をのぞいては、ほかに何もなかった。枕元からは微かに寝息のようなものが聞こえていた。

　感心した子だね、と向かいのベッドの婦人から声を掛けられた。それが妙に非難がましい響きを帯びて聞こえた。学校はどうしたの？その人が尋ねる。答えようとすると、声が詰まって出てこない。こんなところで何をしているの。女の人がさらに問い詰める。ちょっとこっちへいらっしゃい。眉を難しくして手招きする婦人の手が見えたのを最後に、あたりが真っ暗になり意識が途切れた。

　目を開けるとまだ病院の中だった。隣の女の人はベッドを倒して、死んだようになっている。体温を測らせてもらいますね、と言って笑顔の穏やかな看護婦が入ってきた。その顔が小僧には、そんなことはありえるはずもないのに、どこか姉の面影を留めているような気がした。しかし、帰りの道で父親の姿を見かけたときだった、それが物置部屋で煙を上げていた女の人の笑顔に似ていたということに、ふと思い当った。

　父親は亡霊のように小僧の前を横切った。手にはビニールの袋を提げていた。おそらく惣菜屋の弁当が二人前入っているのだろうが、向かう先は家とは正反対だった。父親が通過していった四辻まで早足で向かい、抜けていったほうを見やるとよたよたとずいぶんと鈍そうな動きなのに、その影はもうだいぶ遠くのほうを歩いていた。脚はあるものの、その影があまりに薄いことに小僧は驚いた。いったいいつから父親はあんなふうになってしまったのだろうか。一声掛けたらそのまま空気の中に消え入ってしまうのではないかと思えるほど心許ない後ろ姿だった。

「あれが四十年後の君の姿だ」

　声がまた聞こえた。心臓にちくちくと針を突き立てられるような痛みを覚えた。声を掛けることができずにいると、父親の影はやがて黒い粒のようになり、なだらかな上り坂の彼方に落ちていった。

　小僧の隣の部屋は他の二つの部屋と同様に物置部屋になっているはずだった。しかし、何の気なしに開けてみると物など何もなく、ただ布団が中央にひと組敷かれていて、掛け布団がめくれたまま盛り上がっている。疲れていたせいか急に眠気がさして、誘われるがままに中に潜り込んでみると、もう昼過ぎだというのに、まるで起き抜けの布団のように温かった。枕元には銀の灰皿があった。三、四本の吸い殻が入っていた。畳の上に灰が少しこぼれ落ちていた。

　他人のにおいが染み付いていて、どうも寝心地が悪い。そう思いながらうつらうつらするうちに、階段を駆け上がって誰かが騒々しく隣の部屋の中に入っていく音がした。さあ、今日も疲れた。どこかで聞いた覚えのある声だなと思っていると、なんのことはない、よくよく聞けば小僧自身の声だった。しかし、それもおかしいじゃないか。自分は隣の部屋で寝ているのだから。

　奇妙な話だが、小僧は自分自身が誰であるのか確認するつもりで、布団から抜け出して小僧の部屋の前に立った。向こう側にも人が立っているらしく、扉の把手に手を掛けようとすると、小僧が触れるより先にゆっくりとそれが回り始めた。しばらくはじっとそれが開かれるのを待っていたが、その瞬間が近づくにつれ、次第に恐怖が増して、まさに今開かれようというそのときになって小僧は屋根裏の部屋にとっさに逃げ込んでしまった。しかし息つく暇もないうちに、今度は屋根裏のほうから物音が聞こえてくる。隠しておいたランプもなくなっていた。暗闇に手探りで歩き、梯子を上った。上りかけて、入り口から小僧を見下ろしているやまんばのイメージが不意に脳裏をよぎり、また足を止めてしまう。すると、背後で扉が静かに開かれる気配がして、外の光がわずかに差し込んだ。足音が近づいてくる。それは徐々に大きくなり、やがて止むのだが、小僧にはその者の姿が見えない。梯子を上ることも、下に下りることも、振り返ることも小僧にはできなかった。何ものかが少なくとも三人、暗がりに息をひそめていた。

　おい、という低い声がしたと思い振り返ると、父親が足元のところに立っていた。飯買ってきたぞ、と父親が言った。小僧は布団にすっかり、くるまって寝ていた。しかし、父親は一瞥をくれたきり、それについては何も言わずにそのまま部屋を出て、階段を下りていった。台所の流しに弁当の空箱がひとつ打ち捨てられていた。小僧はテレビを見る父親の背中を眺めながら、弁当をつついた。ときどき父親は大きな声を出して笑っていたが、小僧にはそれが意味もなく声を立てているようにしか思えなかった。

　終業のチャイムが鳴ると、教室の戸が開き、俯き加減で教師が出てきた。教師は振り向きもせず、戻っていいぞとも言わずにそのまま廊下をつくづく眺めては、今日の授業の出来を省みているかのようにうーんと唸り、小首を傾げ、まもなく階段に続く丁字の廊下の角を折れて小僧の視界から消えてしまった。次の授業の開始時に別の教師に訝しまれ、さっさと教室に入れと言われるまで小僧は、ひとり鞄の重みに耐え、廊下ではしゃぎ回る他の生徒たちを横目に見ながら、動き出したい気持ちをじっと抑えていた。小僧が席に着くと後ろの席の生徒が特別意味もなさそうに、小僧の背中を鉛筆でつついてきた。うるさいなあ、と言い小僧が振り返ると、生徒はただ小僧の口真似をして特に反省するでもなく、小僧が元に向き返るとまたつつき出すのだった。手で払おうとしても、払おうとするその手をつついてくるし、鉛筆をうまく捕えることができたとしても今度は別の鉛筆でつつき出す、といった具合で埒が明かなかった。それなのに、散々嫌がらせをされていても最後に怒られるのはいつも小僧のほうだった。何をもぞもぞとしている、落ち着きがないやつだ。授業半ばにきて教師は、今まで見て見ぬふりをしてきてやったが、いくら寛大な私でもいい加減我慢がならぬ、とでもいった厳めしい顔つきで小僧のほうを睨みつけるのだ。こうしてまた小僧は立たされることになる。どうしてこうも教師というのは人を立たせるのが好きなのだろう。後ろから笑いを堪え忍ぶような声が洩れて聞こえてくる。

　窓から差し込む光が教室の半ばまで伸びていた。そこを境にして、窓側では陽気にいざなわれるせいか、まどろみが心なし深く安らかに思われ、廊下側では眠気を堪えるような目蓋の重さばかりが際立つように見え、わずかな違いではあるが、しかしそこには確かにくっきりとした明暗の分け目があるように感じられるのだった。小僧は教室のちょうど真ん中の、明とも暗ともつかないような席の前で立っていた。しかし遠目では明瞭かに見える境目もその実、近づくほどにあいまいになるもので、小僧のまわりには安穏とも暗澹とも言えない、どちらつかずのまどろみの気配が漂っていた。よくよく見返してみれば、それもそのはずで、目蓋のとろみ方ひとつ取ってみても、光の射す窓側だろうが寒々とした廊下側だろうが、個々については若干の違いすら傍目にはわかるはずのものではなく、ただ夜と昼の線引きと同じように目蓋の落ちる人の数のわずかな相違だけが実は境界を見定める判断材料たりえているのだった。小僧は何がなし昼とも夜ともつかない、黄昏の中にいるような心地がし、病院の帰りのススキの穂の白さをひとり思った。

　鴉の群れが夕日のかかる山の向こうへ帰っていく。太陽が最後の力を振り絞るように、ひときわ強く、何か物言いたげに、輝き出す際があるが、そんな折も過ぎ、諦念とでもいった表情をその残光のうちに含んだ柔和なと言おうか、物静かなと言おうか、どこかしめやかな入り日の影にあたりが包まれ始める、そんな帰りの途上だった。小僧が道端の石を蹴飛ばしている、その姿が道の辺のススキの穂とともにぼんやり浮かび上がる。転がる石の影にもはや目の動きが追いつかない、薄暮れの道である。

　昨夜の月がきれいだった、と言った母親の顔がススキを見るたびに、思い出される。家にいるうちは、月など悠長に眺めている暇もないような母親だった。朝は早くから働きに出て、夜遅くに帰ってくると、急いで夕飯の支度に取りかかる。食事もひとり早々に切り上げて、今度は水仕事にかかり、家の人がもさもさ食事を終えてからテレビなど見てくつろいでいる間にも、風呂を焚くだの洗濯物をたたむだのと、細々とした雑事に追われ、しかし合間合間に団欒に加わることも忘れず、やがて家族が寝静まり、ようやく家事もひと段落着いたかという頃には、もう真夜中である。丑三つ時か、それよりさらにふけた夜のことであったか、たまに通りかかる車の音もすっかり途切れ、闇がそのままこごったような刻限に、小僧がようようの思いで階段を下りると、居間のほうから俄かにほのかな黄色い光がさして、それがじわりと目のうちに広がり、中から縫物をする母親の姿が幻影のように立ち上る。お便所かい、と裁縫の手を休めて問いかける母親の声に答えるともなく、ただ黙ってこくりとこうべを垂れる、用を足して便所から出るとまた母親から、おやすみなさいとひと言声をかけられる、それだけのことで帰りの恐怖もいくらか和らぐような心地がしたものだった。

　四十年の歳月を経て、母親が再び倒れたとき男のうちに湧いたものは、遠く離れたはずがどうしたわけか、いつのまにか巡りに巡ってまた小僧のころに逆戻りしてしまったという奇妙な実感、ある種の徒労感ではなかったか。小僧の迷路が分岐に分岐を重ねた末に、複雑巧妙な循環路を幾重にも描いたように、順調な前進を遂げているかに見えた男の足もどうやら迂路に迂路を重ねて、気づかぬうちに環状線を描き、遠い過去を目指して歩いていたということになるのか。病室に入ったとき、いの一番に目の中に飛び込んできたのが、衰弱しきった母親の姿ではなく、母親の前で無心になって出口の見えない迷路に指を這わせる小僧の姿であったというのはいかなる因縁があってのことか、そのときは怪訝という以上に憤りすら覚えぬわけにはいかなかった。

　テーブルの上を見れば、やはり木片がある。それが失われたのも今となっては遠い昔のこと、そうやって久しく思いなしてきたものが、どういうわけか最近になってまた鮮明な記憶としてたびたび蘇るようになり、その断片が押し止めようもなく次々流れてゆき、浮かんでは消えていく、そんなことを繰り返している。

　六十見当の女の、いささか神経に障る太い声が耳に纏わりついている。学校の帰り道だった。小僧は透明な袋の中を覗き込んでいる。中にはダンゴムシが入っている。理科の実習で使うから集めてくるようにと言われたのだ。割り当てはひとり十匹だったが、小僧の袋の中には目算でも百匹はいるように見える、それが硬い甲殻を寄せ合い、無数の脚を蠢かし、がさごそと袋の底で音を立てている。小僧はその袋を顔の前に掲げて歩いていたのだ。

　小僧が女の人に突然腕を引っ張られたのは、正門を抜けてから近道をしようとして横切った郵便局の駐車場の出入り口のところだった。腕を取られると袋が揺れて、中にいる虫のいくらかが丸くなって転がった。女はその灰色の群集を見てまず眉をひそめたが、すぐに小僧のほうに向き直り厳しい目を向ける、頭に血がのぼった様子である、そしてなにやらがみがみと捲し立てるのだが、その内容が小僧にはさっぱり理解できない。やがて郵便局の入口の脇に立っていた警備員の男が異状を察知してやってくると、そこで女もようやく冷静さをいくらか取り戻したようで、口調も多少和らぎ、警備員の言葉を通じて小僧にもようやく事態が飲み込め始めた。どうやら女は小僧が車内の物を盗ったとしきりに訴えているらしいのだ。女は小僧とその鞄を交互に見比べ、指を差し、地団太を踏むように脚をじたばたさせては警備員に唾を吐きかけている、それはさながら詐欺の被害にあった者のごとき風情である。警備員の男は小僧に鞄の中身を見せてくれないかと半ば強制の含みをもって尋ねた。小僧があたふたした様子で鞄を開けると、中には教科書とノートと木片があるばかりだった。小僧は中身を確認させるように鞄の口を二人のほうに向けていたが、それが女にはじれったく感じられたのか、小僧から鞄を取り上げるなり、中身を神経質そうな手つきでいらい、それらを掻き出すようにして次々路上に放り出していった。やがて、木片が女の人の手に掴まれる。すると、それまでの勢いで放り捨てられるかに見えたその手の動きが俄かにためらいがちになり、早くも次の獲物に向けられたその視線を再び木片に向け返して、ためつすがめつそれを眺め始めるのだった。

　小僧には俄かに信じがたいことであったが、女はその木片が間違いなく自分の持ち物であると主張し出したのだ。しかし、あなたの車にはちゃんと鍵がかかっているようですが、という遠慮がちな男の問いかけにも女は怯む素振りすら見せなかった。私の車の中には孫に積み木をつくってやるための木材が積まれている、それをこの小僧がまんまとくすねようとしたのに違いない、と言い女は頑として譲らない様子だった。それどころか、近頃の小僧はあらゆる悪事に長けているようだからと、末恐ろしい子だとでも言いたげな非難の目を小僧のほうが逆に向けられてしまうという始末で、それには男もそういうこともあるかもしれないと納得せざるを得ず、まあ、それでも木片ひとつですからと小僧をかばうように女を宥めすかす形勢になったときには、すでに小僧の罪状も動じがたいものとなっていたようだ。女は木材の積まれた後部座席に小僧の木片を無造作に投げ込んだ。エンジンをかけ、車をバックで出したかと思うと、恨みがましい眼差しを小僧に向け、屁をひるようにクラクションをひと吹き、ふた吹き鳴らし、最後まで騒々しくしながら駐車場を去っていった。警備員はほっと肩で息をついてから、これを機に心を入れ替えるように、などという戒めの言葉を小僧に言い残して、今日はなんだかいいことをしたな、というすがすがしい顔つきで職場に戻っていった。小僧の教科書とノートが地面に散らばっていた。拾い上げてみれば、そのうちのいくつかにはタイヤの跡が残っている。それを見ながら、消しゴムでとれるだろうかなどとぼんやり思っている。この事態をどう捉えたらいいのか、小僧にはまだ判断がつきかねていた。悲しみでもなく、不安でもなく、落胆でもなく、安堵でもない、言葉にならない混沌とした感情が燻ぶり始めている予感のようなものばかりがただ心臓の周辺でざわついている、小僧は袋の底で這いずり回るダンゴムシの足音に耳を傾けながら漠然と、そんなようなことを感じていた。

　その木片が四十年経った今になりまた、あの頃と変わらずテーブルの上に置かれている、そして小僧はあいも変わらずいまだに迷路を描き続けている。

　風が冷たくなり始め、ふと気がつくと空も高く、畦道や道端のあちらこちらで朱色の曼殊沙華が顔を覗かせている、そのような季節に母親は病院に運ばれた。その頃はまだ母親も物を言うだけの元気はいくらか残っており、意識もはっきりとしているようだった。それからひと月も経つと次第にはっきりとした衰弱の色が顔に現れ、昼間でも目を閉じていることのほうが多くなり、たまに喋る言葉もすでに分別を失くし寝言のようなうわ言のようなものでしかなくなっていた。病室は完全な個室で、小僧の頃に見舞ったような六人部屋ではなかったのだが、男が病室を訪ねるといつでもそこには小僧の影が見えるのだった。影は迷路の道筋にひたすら指を這わせ、後ろに立つ男の姿に気づく気配は一向に感じられない。小僧に椅子をとられ、男は仕方なく立ったまましばらく母親の顔を覗きこむ。眉間に皺を寄せるだけの元気もすでに尽きてしまっただけなのかもしれないその顔が、男の目には安らかな寝顔のように映っていた。これで母親も楽になれるだろう、というのは残される側の都合のよい慰みぐさでしかないのかもしれない。とは言え、自分の中に住みついている母親のほうに往生を遂げてもらうことも同じように必要なことではあるのだから、などとそれ自体また慰みぐさでしかないようなことを甲斐もなく、口の中で呟いている。

　カーテンが閉ざされており、外の景色は見えないが、風で揺れるカーテンの隙間からわずかに光が射し込んでいる。光の筋が掛け布団の上を斜めに横切り、小僧の白帳の上に、そして木片の上に続いていた。光だけが変わらない、不意にそのような言葉が脳裏を掠めた。しかし、しばらくしてから、今度はいささか冷めた心地で、いや、光もまた変わらないのだ、と訂正を加え、結局何も変わっていなかったのだ、小僧も、母親も、とさらに続けた。

　小僧をあとに残して、男は病室を出た。そのときになってようやく、ススキを持ってきてやろうと思っていたのに、今回もまた忘れてしまったということを思い出した。ここの月はきれいか、という男の戯れ言に対して、見えやしないよと冗談ぽく返していたのがわずか半月ほど前のことだった。虫の声だけでも情緒があるだろと言っていたのが、それから一週間足らずのうちにふっつりと絶えてしまった。せめて室内の色取りだけでもと思っているうちに今度は母親のほうが弱ってしまう。不甲斐ない、などと言いつつまた忘れるのだろうなと、いつの間にかどこか諦めに似た気持ちでいる自分に愕然とさせられる。それならまだいい、と男は思った。愕然とするほどに感情的になれないことなど初めから目に見えていた。見舞いに来ては帰り際になって忘れたのに気づき、何の感慨もなく、ただ部屋にはいつまでも空の花瓶が残る。ススキを数本その辺の道端で引っこ抜いてきて、花瓶に活ける、それだけのことが四十年経ってもいまだに果たせないでいる。

　廊下ですれ違った看護婦の顔に姉の面影を見て、ありえないことだとひとり苦笑する。会ったこともない姉に対する憧れをいまだに捨てきれずにいるのかと、さらに苦笑したくもなるが、得手勝手な夢想は子供の頃から染み付いた習慣みたいなものだから、いまさらどうしようもない。

　姉の家から突然の訃報が入る、そんな縁起でもない場面をどういうわけか近頃よく想像したり夢で見たりするようになった。手紙に同封された地図を頼りに斎場に向かうと、意外にもそこは実家のすぐ近くであるらしい。男はあいにく地図が読めなかったが、それをタクシーの運転手に手渡すと、ああ、と何でもなさそうに地図を返して、すると辻を三つか四つ、左右に折れたか折れないかするうちに車が停まり、もしや道に迷ったかと心配そうな面持ちで身を乗り出した姿勢のまま固まっている男に、着きましたよと運転手が振り向きざまに声を掛ける。物の数分だった。民家のような家の門前にどうやら夫のものであるらしい苗字の入った看板が立て掛けられてある。門をくぐり玄関を上がり、そこで記帳を済ませてから受付の案内に従い廊下の突き当たりを左に折れると、すぐ右手前方にわずか八畳ばかりの手狭な一室が見えてくる、そこで通夜が細々と営まれているのだ。黒い服を着た男女が数人いたが、どれも知らぬ顔で皆相手の男の親類ではないかと思われた。すでに読経も終え、人の出入りも途絶えがちになり、内輪の者だけでの打ち解けた空気が徐々に広がり始めたという、ちょうどそのような頃合いだったのか、人の顔にもちらほらと慎ましやかな笑みが覗かれていた。それだけに一層、入るとたちまち空気のこごっていくような感じが男には強く意識された。焼香の台の脇に坐する喪主の男が軽くお辞儀をする。顔は知らなくとも、報せをよこしたのだからこちらが来ることぐらいは当然予期していたはずなのに、男が焼香と拝礼合掌を済ませても、喪主はむっつりと黙り込んだままでいる。単に悲しみが深いだけなのかもしれないが、ただそれにかこつけているだけなのではないかという浅ましい憶測が、その男の眼つきや態度を見ていると、どうしても働いてしまう。父親の背中が思われた。ビニール袋を片手に提げて、肩を落としたようにしてよたつく男の後ろ姿が、逆光に照らされ、黒く霞んで見える。あの男の姿はけっして何かを許さない者のそれではなかった。あれは確かに許されることがかなわぬと知り、絶望しきった者のなれの果ての姿だったのだと、妙に確信めいた情感が今になり湧いてくる。

　ついに姉の死顔を拝むことはなかった。夢はいつも棺を覗き込む手前で途切れ、取りとめのない想像もそれを頑なに拒むかのように、いつもそこで尽きてしまった。生きていれば姉はもう小僧がひそかに思い描いたような若い女などではなくて、男であればそろそろ定年に差し掛かろうかという高齢の際も際であるはずだった。それなのに男は、棺の中に横たわっているのは若い女であるに違いないと、手を合わせながらなぜかいつもそのように思っているのだった。しかしだとすると、いったいその女はいつ死んだというのか、何年前の葬儀であったというのか。

　次第に小さくなる、小僧の背中を見送っていた。宵の冴えわたる空気が小僧の蹴飛ばす石の音を遠くまで凛と響かせている。いま、上り坂を上ろうとしている。残光が静まり、影が闇に紛れ始める。黒く小さな粒子の集まりが暗闇の中で揺れ、拡散しながらやがて溶けていく、それが男の目には奇妙にも自分の父親の姿と重なって映る。

「あれが四十年後の君の姿だ」

　誰のものでもない、いや、まさに自分のものでしかない、その声が不意に聞こえてくる。そうか。やはりそうなのかと、すっかり得心したように男は深く息をついた。四十年前に小僧はその薄れゆく父親の背中に、四十年後の自分の姿をぼんやりと見ていた、そして四十年経った今、男は四十年前の自分の姿の中に父親の背を見ている。何も変わってやしなかった。結局、巡りに巡ってまた元に戻ってしまっただけだったのだ。

　しかし、絶望がきわまって思わず笑みが洩れる、そんなこともあるものだろうか。知らずしらずのうちにほころんでいた口元をおさえ、男は訝しく思った。

　家の階段をギイギイと踏み鳴らしていると、かつての恐怖が、今度は若干のおかしみとともに、蘇ってくる。長年住みついた家というのはなかなか離れがたいもので、独り暮らしを始めるようになってからもしばらくは、週に一度くらいのペースで戻り、母親の手料理を食べては寝て帰るということを繰り返していた。やがて妻ができ、子ができると、そういうわけにもいかなくなり、家にもほとんど寄り付かなくなってゆき、母親が倒れるまでそのことに何の後ろめたさも覚えず、妻とともに自分たちの小僧の成長をただ見守るうちに、いつの間にか歳月が流れていた。

　脳出血で父親が急逝したのは昨年の暮れのことで、それから一年も経たないうちに今度は母親が病に伏した。その報せを受けてからというもの妻はほぼ毎日、こちらから頼んだわけでもないのに病院へ通い詰めてくれていた。病院までは自宅のアパートから電車で一時間以上かかり、やすやす通えるような距離でもなかったので、妻の身体を気遣わしく思ったが、どうせ暇を持て余してるから、それに私が心配なのだから、と妻は笑って、特に苦にするようでもなかった。その埋め合わせにはとてもならないだろうが、父親とその小僧はある日二人でこっそり話し合った結果、母親の身体を休ませるためにも週末は母親の代わりに二人でお見舞いに行こうということに決まった。ほんとうは平日にも行けるといいのだけれどと、詫びるような気持ちで提案すると妻は、そんなのいいのにと言って心なしか寂しそうな顔をつくった。翌日の土曜、朝早くに支度を済まして小僧と玄関の前に立ったときに、ふと声がした気がして振り返ってみると、そこにピクニック用の大きなバスケットを持って妻が笑顔で立っている。そして二人が外に出ると彼女もそのままついてくるのだ。二人だけでずるい、と少しおどけたような調子で彼女は言った。そういうわけで結局、週末は妻と小僧と三人でお見舞いに出かけることになり、男の実家が病院から徒歩で行けるほどのところにあったので、時間にゆとりを持つために、その日はそのまま男の実家に泊まり、翌朝にアパートに帰るというパターンに自然と落ち着いていった。

　男は階段を上りながら、子供が寝ているからという妻の言葉を思い出していた。きっと病院で疲れたんでしょう、と妻が言う。男はソファに腰掛け、その下の床に脚を崩して直接座り込む妻の肩を揉んでいる。妻は父と子よりも先に実家に帰り、家の整理や夕飯の支度をととのえていた。台所の鍋にはもうカレーの用意ができていたが、夕飯の時間にはまだ少し早い。晩婚のため、二人の顔にはもう皺が寄り始め、髪には白髪も多く交じっていたが、小僧がいるせいか二人はまだ二十代の頃と変わらず自分たちも同じように若いような気がしていた。体力の衰えもいまだ感じたことがない。揉めば妻は気持ち良さそうな声を洩らしたが、妻の肩は日ごとの家事の割には、それほど凝っているようでもなかった。妻と話す内容といえば取りとめもないものでしかなかったが、話すだけでこうも落ち着けるものなのかと、ただそれだけのことに男は結婚するまで気づかずにいて、新婚当初はそんなささいなことに男はいちいち感動を覚えていた。結婚なんてと二十代の頃はよく洩らしていたものだ。あんなものはただ親を安心させるためだけにあるのだと、そう大言を吐いていた。当時の言葉が間違っていたとは別段思わない。ただ結婚してみて、やがて子供ができ、気づいたときにはそれが良くも悪くも、男にとって手離せないものになっていた。特別大きな不幸もなく、苦労もなく、かと言って絶大な幸福感のようなものがあるわけでもなく、妻と小僧との生活がただなんとなく好ましく、居心地のよいものとして緩やかに続いていた。これからはここに住むのかしらね、などと不謹慎であることを知りつつ、しかしそれでもためらいがちにあえてそんなことを言うところに、男は妻の気遣いを感じた。もちろん絶対に住まなければならないということではなかったが、そのまま空家にしておくのもどこか居心地が悪く、かと言って借家にするには家が古すぎる、取り壊すのも気が咎める。もともと住み慣れた家ということもあって男の心は住むほうに傾いていたが、小僧の学校や近所付き合いなど何かと面倒なこともあるだろうし、引っ越しのことはこちらからはなかなか切り出しにくいことだった。また実家に移り住むことが最良の選択であるとは男自身にも思えなかったということもあって、現実的な選択肢として提案するだけの積極的な意義に欠け、男の頭のうちでそのまま立ち消えになろうかとしていたもの、それが妻の手によってさりげなく拾い上げられたのだ。妻のあどけない表情を見ていると、彼女は彼女でただ単純にここに住みたいと思っていただけなのではないかという気もしてくるが、しかし理由はどうあれそのようなささやかな言葉の一つひとつから、男は妻に対する愛情を深めていた。

　そこに小僧がいる、そう思い男はかつての自分の部屋の戸を開けたが、中には誰もおらず、何もなかった。真っ暗な部屋に、ただ月明かりが射している。久しぶりに寝転んでみると、畳が思いのほか冷たかった。畳の上から仄かに白い光の反射が立ち上っている。天井がこんなにも低かった、高校や大学の頃には伸長も今ともうほとんど変わらないくらいにはなっていたはずなのに、そんなことに少しも思い当らなかったのがかえって不思議なくらいだった。寝転びながらでも手が届きそうな気がして、男は手を真上に伸ばしてみた。すると天井が、逃げるように高くなる、近づいては離れるようだ。求めれば逃げるが、求めなければいざなう。自分の背中を見ようとして鏡と騙し合いのような、知恵比べのようなことを本気でやっていた頃の記憶が蘇り、それが先日の息子の姿と重なって、思わず苦笑した。夜空を見上げたまま、息子が突然走り出したかと思うと、急に止まり、そしてまた急に走り出す。また急に止まる。急に走り出す。何をしているのかと訝しみ、息子のあとをゆっくり追うと、たいそう不服そうな顔がこちらを振り返り、月がからかうのだ、と言う。息子が走ると月がそのあとをつけ、止まると月もぴたりと止まる、しかし息子が再び走り出すと月も同じく動き出し、止まるとやはりそれも足を止める、振り切ろうとしても振り切れない、どうしてもついてくる。

　姉の物置部屋の前で立ち止まり、そっと耳を澄ましてみる。何も聞こえない、静まりが聞こえてくる。扉を開くと、煙が溢れ出すような気がした。中から女の人が現れる。ごめんね、お姉さん勉強わかんないや、女の人が言う、その口から煙が洩れる。ヒールの高い靴を鳴らして女の人が近づいてくる。屈み込み、煙草を持たないほうの手で小僧の頭を軽く撫で、目には涙を浮かべている。抱きすくめられたか、目の前が俄かに真っ暗になる。桃や苺のかおりがほのかに漂った。甘いかおりとやわらかな感触が同時に広がる。女の人の言っていることがわからなかった。おそらくそれは耳が女の人の身体でふさがれて、聴き取りにくいせいでもあったが、内容がうまく呑み込めないせいでもあり、最後まで耳に残ったのはわずかに、お父さんと仲良くね、というような女の人が去り際に吐いた、その別れの言葉だけであった。

　小僧は隣の部屋で、タオルケットにくるまれて寝ていた。ご飯だよと声を掛けても、もぞもぞと寝返りを打つばかりで、目を覚まさなかった。傍に白帳があった。取り上げてみると、ページの間から鉛筆が抜け落ち、小僧の耳元で鳴った。そんな些細な音で小僧の目が開いた。小僧は眠たそうな目蓋をこすっていたが、夕飯はカレーだよと男が言うと、それは寝耳に水だぞとでも言わんばかりの驚きの色を浮かべて思い切りよく振り返るが早いか、急に動作が機敏になり、タオルケットを勢いよく払いのけて、一気に起き上がるなりせわしない音を立てて階段を駆け下りていった。小僧を見送ると男は白帳を開き、月明かりに照らしてみた。ページから浮かび上がってきたのは、昆虫図鑑を見て最近覚えたらしいカブトムシの幼虫の絵であり、男が想像していたような出口のない迷路などではなかった。

　出口のない迷路か、男は小さくそう呟いた。それもまた悪くない。口元にはやはり、笑みがこぼれている。出口がないから、いつまでも終わらない、いつまでも終わらないから、いつまでも道は古びない。かつて通った道をそれと知らずに、また歩いている。循環するたびにその都度違うことを思い描き、違う足取りで歩いている。違う道のりを同じことを思い描きながら、同じ足取りで歩いている。その繰り返しが常に新しい。新しいものが常に繰り返される。無駄にみえる道すべてに意味があり、意味があるかにみえて、その実まるで無駄なものでしかない。徒労の裏から満足がこぼれる。

　食卓では小僧がすでにカレーライスを食べ始めていた。かつての男の席に小僧が座り、その隣の、男の母親の席だったところに妻が掛けていた。男はかつて父親が座っていた席に腰を掛け、はすかいに小僧の姿を見守る。何かに急き立てられるかのように、スプーンと口を慌ただしく交互に動かす小僧がいる。カレーは小僧の好物だった。しかし、いくら食欲旺盛にみえてもやはり子供の胃袋にはそれ相応の限界があるようで、お皿一杯食べ終えるとそれ以上おかわりを要求するでもなく、小僧はすっかり満足した表情になり、充実した腹をさすって、居間のソファにテレビのヒーローのような格好をして掛け声をかけながら飛び込んでいった。父親と母親は小僧の独り遊びを眺めては、ゆっくりとスプーンを動かしてそれを口に運んだ。たまにお互いの顔を見交わしては、はにかむような微笑みを交わした。

　やがて夜もようよう深まろうかという頃に、小僧が母親の膝の上で眠ってしまうと、二人は眠気というよりも何か温もりのようなものに誘われる心地で、母親は居間の隣室に布団を並べ、父親は静かに小僧を運び込み、三人揃ってそのまま布団の中に潜り込んでしまう。布団は三つ敷いてあるが、真ん中の小僧の布団に両脇から母親と父親が小僧に寄り添う形に自然となり、しばらく小僧の寝顔を見つめては、頭をそっと撫でている。両脇から見つめ合い、お互いの頬に唇を寄せて、それから交互に小僧の顔に口づけをする。傍からみたら気恥かしいようにもみえるこんな習慣も、二人にとっては年来生真面目に、毎日欠かさず果たしてきた大切な就寝の儀式であった。小僧がまだ子供のうちはと、毎日寝る前に男は心のうちで呟いていた。夜が身内に込み上げてくる。意識が暗くなり、温もりの感覚だけがいつまでも身体に残る。

　目蓋を開けたときに目の前にある顔を父親の顔と間違えて、もう朝かと呟きそうになり、すんでのところで思いとどまる。温かい布団がどこにもなかった。母親も父親もいなかった。その代わりに目の前には厳めしい顔つきをした教師が立っていて、教室じゅうの生徒たちの視線が小僧のほうに集まっている。立ったまま寝るとは器用なやつだなと教師が言ったが、特に感心した様子でもなさそうだったので、迂闊にハイ、と答えるわけにもいかずどうしたものやら小僧は黙ってそのまま下を向いてしまう。すると、ゲラゲラと愉快そうに笑う生徒たちの声が聞こえてくるのだ。

　そのようにして一日が、ほとんど夢のように過ぎていった。

　一緒にお見舞いに行こうかと父親が言い出したときも、小僧は半ば夢見心地でぼんやりその言葉を聞いていた。父親の顔を見つめ返したりなどしては、弁当の里芋を箸の先でつついた。自分も父親も、次の日になればきっと、何もかも忘れてしまうのだろう。ところが、そんなふうに前日のやり取りをあたかも今起こっていることのように布団の中でうつらうつらと反復していると突然戸が開いて、そのときはまた、飯買ってきたぞとでも言われると思ったのがどうやらそうではなく、行くぞ、とただひと言、いかにも快活な調子で言い、すでに支度もできているようなのだった。

　父親に手をひかれ、緩やかな坂道を上った。父親の手は母親のものと違い、皮が分厚くて、ごつごつとした手触りがまるで伸縮性のない硬いゴムか何かのようだったが、思いのほか熱を帯びていて、それが小僧には少し熱いくらいに感じられた。坂の上で父親が立ち止まった。ちょうど朝焼けが始まるところだった。乱雑に散らばった家並みの向こうの、空と地の境目のところから、白みがかった微かな予感のうちに、一点の小さな光が煌めくように現れる。それが境界にじわじわとにじみ出してやがて線に変わり、徐々に盛り上がりながら広がっていくと、気づいたときにはもう、町じゅうに踊るような光が溢れている。すると太陽の熱が父親の手を通して伝わってくるかのように、いつの間にか、つなぐ手からも汗がにじみ出ている。光の視線に全身浸されながら、小僧でもなく父親でもないものが、しかし同時に小僧でもあり父親でもあるような何かとして、母親や姉のことをただ思っている。

　これがあのとき父親が見ようとしていた景色だったのだろうかと、雀が目覚ましのようなけたたましい声を上げて視界を横切り、不意に我に返ったその頭で、今度はビニールの袋を提げたあの日の父親のことを思っている。朝日を求めて、夕闇のなか、すでに沈んでしまった夕日に向けて手を差し伸べる、そのような父親の姿が脳裏を掠めた。

　目が覚めて、小僧たちが来ていることを知ると母親は、二人して大げさだねと、目を少し大きめに広げてみせてから呟くようにそう言った。父親は病室で特別母親に優しい言葉をかけるでもなく、話をするでもなく、ふんと鼻を鳴らしてみたり、膝を叩いてみたり、立ち上がってはふらふらとベッドのまわりを歩いてみたりと、終始落ち着きがなかった。小僧はいつものように黙々と白帳に向かい、指を動かしていた。

　風に押され、カーテンの裾が扇のように膨らむ、その形に沿って光が床の上にゆっくりと広がり、それが手前のベッドに差し掛かると束の間、形を歪め、また静かにひいていく。少し強めの風が入りカーテンレールが軋んで、小さく音を立てた。遠くの工事現場のほうから木の板を打ち付けるような音がずっと聞こえている。白帳の上で小僧の指が行きつ戻りつを繰り返しながら、慎重な速度を保ったまま迷路の道筋をいつまでも巡り続けていた。小僧の白帳には消しゴムでも消えないタイヤの跡が黒ずんだまま残っている。失われた木片のことが小僧のなかではまだ、燻ぶったままでいた。

　帰り道、小僧は父親に屋根裏の秘密を教えてあげようかと、妙な慈善家精神がはたらいて、そう思ったのだが、やめた。もう何も言うまいと小僧は思った。

　夕闇が迫り、風が凪いでいる。父親の哄笑が風に流されず小僧の耳元に留まったまま、いつまでも騒いでいた。